

遺稿から

連休の旅

和田 奈良子

予約していた鹿児島のホテルに着いたのは、昼を少し過ぎていた。六階の窓から、桜島が薄いブルーの海に活発な動きもなく静かに浮かんでいるのが見えた。

「今日は描けるだろうか」

描き始めにいつも思うことだった。絵も歳とともに老いていく。これは亡き師の言葉である。幾枚描いても、なかなか気に入った作品はできないものだ。

黄昏れていく錦江湾に浮かぶ桜島に向かって手元が暗くなるまで描いた。少し満足した。夕食も、久々に美味しかった。

翌朝、西鹿児島駅から枕崎行きの列車に乗って、すぐに後悔した。乗る時間がかかり過ぎることに気が付いた。今日は描けないのではないだろうか、そんな気がしてきた。

枕崎駅も無人駅になっていたとは知らなかった。案内書を見ていると、目の前をすつと坊津行きのバスが通り過ぎた。

坊津の湾の景色も素晴らしい、とあったのを思い出した。ところが、次は二時間待たなければ便がない。三時間近である。

タクシーに乗り、リアス式海岸を走る。日本の海岸線は、どこもよく似ている。が、窓からの風景はどこか懐かしい。

坊津に着くと、運転手が湾の眺めが一番良い宿だという場所で降ろしてくれた。ところが、当日は予約で満員ですと断られ、別の宿を探すために村落を下って行つた。小さな漁村で、途中出会った村の人に「この風景はどのあたりでしょうか」と、パンフレットの写真を見てもらうと、「これは舟で行かないと駄目ですよ」と教えられた。

せつかくきたのだからと、これも案内書に載っていた宿に着くと、思わず入るのを躊躇つた。木賃宿というべき佇まいだ。そこは、昔密貿易関係の隠れ家だったそうで、当時のままなのだろう。中に入ると、壁に貼り紙があり、宿泊しない見学者は二百円、案内付きなら三百円とある。ここを訪れた作家や有名人の名前が書かれ、テレビや有名な作家の作品の中にも登場する宿であることを知った。

私は躊躇したが、奥から出てきた年配の婦人に「今晚泊めていただけますか」と聞いた。

「相部屋になります。小さなお子さん連れの三人ですよ。二食付きで五千五百円です」とのことである。

私が糖尿持ちの体であることも考えた。湾の風景も惜しいけれど、いつそ開聞岳まで足を延ばすのもいいか、と思いをめぐらせた。となると、やはり枕崎まで戻らねばならない。下りてきた道を、今度は上る。そこで、一台しかないというタクシーを待つこと三十分。

「お客さん、どこに泊まったですか」

「泊まっています。坂を下りて、上ってきただけです」
運転手にそう説明する。

枕崎を四時三十分発のJRバスに乗った。バスが開聞岳に近付いた頃、乗客は私一人だけになってしまった。

「お客さん、どこまで行きますか」

「開聞岳を描きたいのですが」

「この便が最終ですよ。今日はどこに泊まるとですか」

「まだ決めていません」

「今日は、どこも空いとらんですよ。ここは国民宿舍のほかに旅館は一軒しかありません。そこもいっぱいですよ」

バスは、開聞岳の近くの肉屋の前で止まった。運転手は車を降りると、

「ちよつと電話してやらんね。一人泊まれるかどうか」

そのの主人と知り合いだったらしい。

「やっぱり駄目ですよ。お客さん、もう山川駅まで行かんと、今夜泊まる場所はなかくですよ」

私一人を乗せてバスは走った。途中の車窓から見えた開聞岳の頭には、大きな刷毛で刷いたような雨雲がかかっていた。

山川駅に着くと、運転手は駅員に宿のことを尋ねてくれた。

「お客さん、五分後に指宿行きのバスがきますよ。それで、いつそ指宿に行つた方が温泉もあつてよかですよ」

ところが、その指宿駅に着いて驚いた。駅案内所の前は人だかり。係の女性二人が、立て続けに電話している。私の前の家族連れがやっと決まった。全員が一室で、大人五人、子供二人で六万円。食事はバイキングだそう。

私は列から離れて西鹿児島駅行きに乗った。窓を雨が叩き始めた。〃連休に遊びに行く馬鹿があるもんね〃 出発前に妹からたしなめられた言葉が思い出された。

朝出発した西鹿児島駅に帰り着くと、ガイドブックに載っているホテルに電話を入れたが、全部断られた。間もなく九時になろうとしている。電話をかける小銭もなくなつた。

とにかく、なんとか動かなくてはならない。こんなとき、旅装の軽いののは助かる。スケッチブックを濡らさぬよう、上着の中に抱え込んで走った。ホテルを四軒まわつたが駄目だった。ふと、駅の方なら何とかなるかもしれないと考えた。

上着はびしょ濡れである。せめて声だけでも元氣よくと、駅前の派出所のガラス戸を開けた。七、八人の警官が一斉にこちらを見た。

「ホテルですか。あなたで五人目ですよ」

「その方たちは、どうなんでしょう」

「男性でしたから、みんなサウナを教えましたよ。ええと、女性専用のサウナはなかつたかな。当たってみましょう」

私はサウナというところを知らない。男性だけが利用するものだと思っていた。

三つの電話がかけ続けられた。みんなで電話帳を繰ってくれた。ないようである。どうしよう、最悪の場合ここでお世話になれませんか、と口ごもつたとき、

「ああ、ありますか。女性一人お願ひしたいのです。はあ、いえ違います。泊まるのは女性一人です。こちらは、西鹿児島駅前の派出所からです」電話は切れた。

「連れ込み宿でしてね」

「はあ、でも私は仕方ありませんけど」

「ところがね、二人でないといけないそうです」

笑い声があがったが、まだ別の電話が続いている。

「あることはあるらしいですが、ツインなんです」

「ツイン料をお支払いするということで、お願いします」

これで警察のご厄介にならずに済んだ。ホテルは駅から三分の距離にあった。先に私が電話で断られたところだった。

翌朝桜島に渡ると、売店の横の電話に直行した。今夜泊まるところを決めておかないと、落ちて置いて行動できないからだ。収容人員の多い国民宿舎は当日も満員だった。連休なので、どこも予約以外はありませんよ。横から売店の人に言われたが、最後にかけたユースホステルに、空きがあった。ユースホステルまでは、坂を上り、十分ほどだった。

「こういうところ、初めてなんでしょう。昨夜は私どもでもたくさんの方にお断りしました。ここは二段ベッドになっていて、一室に八人お泊まりいただけます。今のところ空いています。夕方には大勢になるかも分かりません」

電話の対応に出たフロントの女性に案内された部屋には、そのときは私一人だけだった。連休に予約もなく泊めてもらえるだけでも有り難いと思ったが、なるべくなら少人数の方がいいなと願った。

また、雨が降り出した。仕方なく廊下で窓の外を描いていると、傍に少年が寄ってきた。

「こんにちは」

私の挨拶に返事を返した。それが切っ掛けになる。

「君もここに泊まっているの」

「ううん、お母さんがここにいるので遊びに来たんだ」

「君、絵が好きなの」

「好きだよ。でも、ボクは作るのがもつと好きなんだ」

「プラモデルとかなの」

「空き箱が好き。いろんなものができるよ。車とか船とか。空き箱が足りないときはお母さんに買ってもらうんだ」

「そうなの、面白いわね。君は何年生」

「三年生だよ」

色白のほっそりした少年だが、はきはきしている。その子のお母さんがフロントの女性だと知ったのは翌朝だった。

「昨夜は眠れましたか。遅くにお客様が見えて、それも外人さんだったので、びっくりされたでしょう」

同室になった六人のうち、外国人女性が四人も一緒になったのだった。その人の傍に少年が立っていた。

「後で、掃除が済んでから恐竜公園にご案内しましょう。展望台があつて、眺めがとてもいいんですよ」

車で連れて行ってもらった。私は少年と二人で展望台に上った。よく晴れた空の下に、鹿児島市内が港に浮かんでいるようだ。昨夜のかなり降った雨で、埃を落とされた街並は、透明な水彩絵の具で彩られたように見える。

「あれがユースだよ」

左手の桜島の真下にユースホステルがある。ここからでは、

陽が強すぎて掛けない。展望台の下に降りて、鹿児島市内の方を向いてスケッチブックを広げた。



桜島
(垂水港側から)

四十分経った。これ以上少年を待たせるのは気の毒に思え、手を止めた。その場を離れて濃い緑の樹々の間を歩いた。黒っぽい土の上の苔が珍しく、立ち止まっては指で押すと軽く窪む。

「桜島は灰の塊みたいね」

「ここはまだいいんだよ。垂水の方へ行くと、灰だけでなくガスも降るので、ビワなんか駄目になってしまったんだよ。ほれ、あそこに白い紙を被せてあるやつ。あれがビワなんだ。ボク、ビワが大好きなんだ」

「君はよく知ってるのね。勉強もよくできるのでしよう」

「勉強は嫌いだよ」

「あれ、学校が嫌いなもの」

「学校は好きだよ。学校へ行くのは好きだし、友達とみんなで遊ぶのが好きなんだ」

車できた道を歩いて下る。

「おばさんはよく旅行をするの」

「そう、旅行が好きで、絵も好きだからね」

「好きなことができていいね」

「もう、後あまり長く生きていられないからよ。歳をとっているからね。今なら、まだ一人でも歩けるから」

「ボクのおじいちゃんも、もうあまり長くはないんだ」

「あら、どうしてなの」

「この前ね、交差点で自動車にはねられたんだ。それで、入院したんだけど、看病に行ったおばあちゃんが先に死んでしまったんだ。今、おじいちゃんは家で寝ているけど、もう長くはないって言ってる。ボクはおじいちゃんに、もっと生きていてほしいと思っているんだ」

まあ、と思った。今どき、こんな少年がいる。私は、改めて少年に好意を覚えた。

「君は偉いね。おばさん、びっくりしたわ。おじいちゃんを大切にしていなさいね」

「うん、おじいちゃん何でもよく知ってるんだよ。魚釣りだって上手だよ。ねえ、おばさん、ここにくる前はどこに旅行したの」

「中国に行ったのよ、上海なの。君は知らないでしよう」

「知ってるよ、昔おじいちゃんがいたことがあるんだって言うてたよ」

「おじいちゃんが、なの」

おじいちゃんに対し、急に親しみを感じた。

「上海つてとこ、美味しいものがあつた」

「美味しいものはたくさんあつたのでしょね。でも、ホテル以外では何も食べなかつたの。恐い病気が街で流行つていたから」

「恐い病氣つて、エイズでしよう」

「君、そんな言葉どうして知ってるの」

「テレビで見たんだよ」

私は声をあげて笑つた。

「あのね、上海で流行つていた病氣は、A型肝炎というの。魚を食べて病氣になつたという人もいるけど、本当は清潔でないことが原因じゃないかしら」

それにしても、テレビの影響は凄い。対話のない一方通行だけで、子供は育つていく。良いことも、悪いことも吸収が早い。この少年と一緒にいると楽しい。名前の分からない樹の傍を通るときは、ちゃんと名札を探して教えてくれる。

「ね、おばさんはね、港の傍の食堂で美味しいご飯食べたのよ。そこで一緒にお昼をしていこうよ」

「やつたあ」少年の足は速くなつた。

「知ってるよそのお店、ボクはそこでラーメンを食べたい」
ところが、店の前にくると、ガラス戸に貼り紙がしてある。

「本日弁当作りのため、店は午後三時に開けます」

拍子抜けのした顔の少年に、

「他に美味しいお店知らない」

「もう少し先の、国民宿舍の近くにおすし屋さんがあるよ」

「じゃあ、そこに行こうよ」

昼には少し時間があつたせいか、店内は私たちだけ。

「何がいい」

「ちらしすし」

彩りの良い具の上に、ピカリと光る魚がのつていて、味付けにも満足した。

「おばさんこれね、一つ八百円だから二つで千六百円だよ」
思わず、嘔き出してしまった。

ユースホステルに帰る途中、土産品屋に寄つた。少年の好きな果物類は置いてなかつた。

「カステラは好き」少年の目を覗き込んだ。

「うん、大好きだよ。いつもは六百円だけど、今日は五百円だと書いてある」

なるほど、赤線が引かれて金額が訂正されている。少年は包み紙の茶色を選んだ。コーヒー入りだという。

玩具売り場で、かぶと虫の形をした鉛筆削りも買つてあげると、少年は階段を駆けて上つた。

「お母さん、おばさんにお土産買つてもらつたよ。おすしも食べたんだ。おばさん、千六百円払つたんだ」

大声が聞こえてきた。

食堂のテラスから、溶岩の向こうに見える桜島を描いていると、少年がやつてきた。

「今日は楽しかったよ。魚釣りより楽しかった。日記に忘れないで書いておこう。おばさん、これだけは絶対に忘れないでいてね。ボクの名前は中野まこと、というんだよ」

「はいはい、中野まこと君ね。しつかり覚えておきますよ。おばさんは和田といいます。どうぞよろしくね」

何だか奇妙な友情が生まれそうな気がしてきた。

「おばさん、またくるの」

「くるわよ。そうね、七月にこようかな。今度くるときは博多のお土産持つてくるね。何がいいかな」

「博多ラーメン大好き」

「食べたことあるの」

「テレビで見たんだよ」

「わかったわ」

「済みませんでした。まことがいろいろとお金を使わせて」

「いいえ私の方こそ、名ガイドさんに案内していただいて、とても愉快でした」

エイズの話はしなかった。

親子ふたりして、車で私を送ってくれた。国民宿舎の前で降りしてもらった。地底千米のところから湧いてくるという、この温泉の効能に惹かれて、是非入浴してみたいと思つていたからだ。

「おばさん、きつときてね。七月に待つてるから」

窓の内から、モンキーバナナのような手が何度も振られた。

茶褐色の湯の中に手足を伸ばし目を瞑っていると、名前を呼ばれた。別れたばかりの少年のお母さんが、浴場のガラス戸のところに立つていた。

「これ気持だけです」私のバッグの横に置かれた。

「まあ、済みません」

何だか気の毒な思いがした。私の少しばかりの好意が、かえつて負担になつたのではないだろうか。まだ三十もそんなに越してはなさそうに見えるのに、この人は一回きりになるかも知れない旅行者に対しても、出会いを大事にされるのだ。きつとそうなのだ。そしてそんな心が親を大切にしているのだ。少年も、その母から心を培われたのだろう。どんなときにもかかわりなく、このような人たちはいるものだ。

少々のハプニングのあつた連休の旅だったが、ほのぼのとしたものに出会えた桜島が、私は好きになつた。またこよう。足の裏まですべすべしてきた湯に浸り、目を瞑つた。(了)

(付記)

作者は平成十七年十二月没(八十一歳)